伝道者の書　第１２章　７節

「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。」

暗さに、それともひかりへと進むか。分断に進むか、それとも一つとなるか。悲嘆へ進むか、それとも希望へと進むか。破滅に向かうか、それとも新しい創造へと向かうか。他の誰でもない、身内でもない、兄弟姉妹でもない、ただ、自分のなかに選びがある。そして、誰にでもおとずれる、ちりとなる日がある。ここの知者は、霊の行く先さえ知る。それでお終いではない。ちりと霊を語るだけで終わらない。この後その思いを綴っている。

ちりに帰るだけではないことに気付いている。いや、気付かされている。霊の行き先だけが問題ではないことに気付かされている。ただちりが地に帰えればよいのではないことに気付く。ただ霊が神に帰れることではないと気付く。どのように地へと帰り、どのように神へと帰るのかが問われている。死に方を問われているのである。

神のご支配の下で、ちりとなり霊が帰るべき在り様が求められる。生と死を支配される神のご支配のなかで、ちりと霊を突き抜けた、新しいいのちに与る死に方である。そうでなければ、ちりは地に帰るばかりか、さらに厳しい神の怒りに遭い、霊は神の裁きのため御前に立つ。